21世紀の初夢

キーワード

双方向放送, 電子ジャーナル, 英文論文, 適正規模

正員 平田 廣 則

千葉大学

2013年(平成25年)12月大晦日, テレビでは紅白歌合戦がフィナーレを迎えている。取りの男性歌手は, 茶の間のテレビの視聴者から今送られてきたリクエストの集計から, やっと歌う曲が決まったようで, イントロが流れ出した。未だに大学院在籍中の我が家の息子もその曲をリクエストした一人らしく, すぐさまその曲のコンピュータへの取り込みを始めたようだ。

私は, 新年を迎えるまでの数十分の間に, 本年の締めくくりをするため, 茶の間を立ち, コンピュータの前に座った。電気学会のホームページに入り, パスワードと氏名を入れて検索すると, 自分の書いた本年度に発表した論文, 部門大会発表の予稿, 研究会資料, の一覧が現れた。その内容を自分のHDのファイルに取り入れ, 本年度の活動状況の履歴を整理した。

ちょうど0:00に, 各学会から新年の挨拶メールが届いた。電気学会からのメールは, 電子ジャーナルC(電子部門誌と電子論文誌)の発刊を告げ, その目次とトピックスが載っている。電気学会のホームページから電子ジャーナルに入ってみると, 2013年の電子ジャーナルの論文の中でヒット数の多い論文を論文賞として選定して, ○○さんの論文が1,000,000回で一位であることが載っている。その次のページから, その年のすべての論文について多い順に回数が掲載されているが, その中から自分の論文のヒット数を見て, その少なさに唖然!!! 自分が見た1回だけとは…

新年早々研究室に行くと, 学生が来た。

「明けましておめでとうございます。先生, 電気学会に投稿する論文の原稿を冬休み中に書きましたから見てください。」

「おめでとう。おいおい, 今年から投稿は, 日本語と英語の2つの原稿を送る必要があるのを忘れたの?」

「え, 希望者だけではなかったのですか?」

「昨年まで3年間は試行期間だったけれど, 今年からは論文は日本語と英語のダブル原稿を送ることが義務づけられているんだよ。」

「去年, 投稿しておくべきでした。残念!」

「今から急いで書くんだね。勉強にもなるし。」

「自信ないな。」

「心配はないよ。査読は日本語でされ, 電子ジャーナルには, 日本語欄と英語欄の両方があるんだよ。また, 英文は, 学会がアウトソーシングで無料の添削システムを確立していて, 掲載前にちゃんとチェックしてくれるから大丈夫。」

「分かりました。がんばります。」

「あそうそう, また今年から, 昨年までの紙による論文の出版は原則的にはなくなり, 電子ジャーナルを購読するシステムになったんだよ。ただ, 記録のため学会他, 国会図書館等, 国内のいくつかの場所には著者が提出した最終原稿を集め製本したものが, 保管されることになっているんだ。」

「君は就職は, どこにするつもりだね。」

「迷っています。」

「そうだね。20世紀末から2000年代初めにかけての合併, 提携による組織の巨大化の道も, 2010年代に入ってほころびだし, 適正規模に分割が, 始まりだしたところだしね。これもいつかきた道だけど…」

「ところで, 先生, 最終講義はいつにされますか?」

「え, 今年は退官の年か。OHPはもう古いし…, パワーポイントで原稿をつくるにも使ったことはないし…, エーイ, 最終講義は延期だ。一年先だ…」

……………

「パパ, パパ, 初詣に行こうよ。」

中学生の息子の声で, 目が覚めた。

21世紀初頭2001年の正月であった。

(平成12年11月7日受付)

The First Dream in 21st Century.
By Hironori Hirata, Member (Chiba University).